
逃走中！

古泉 楓

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走中！

【Nコード】

N1608U

【作者名】

古泉 楓

【あらすじ】

アニメキャラやらゲームキャラやらを巻き込んで始まった、今回の逃走中。

一体何人が生き残れるのか！

暫くの間、休載とさせていただきます。

再開の予定は現在のところたっていないませんが、10月以降になるか

もしれません。

標的1 ゲームのルール説明！

ターゲット

標的1 ゲームのルール説明

「さて、なぜかルール説明なのに、僕たちが説明しろって言われましたよ」

「何でかしらね」

「あ、カンペが出ましたよ。え〜と、『自己紹介をしろ』ですって」

「まあ、当然よね。私は、桂ヒナギク。ハヤテのごとく！から参戦よ」

「僕は綾崎ハヤテです。ハヤテのごとく！から参戦です」

「あ、また何か出たわね。『逃走中』に出てくるゲーム及びアニメの名前を言ってください」

「なんともまあ、難しい課題ですね」

「そうね。でも、やるしかないわ！」

「うむ！ その意気だ！」

「ナギお嬢様！ 何でここに！？」

「お前たちが、人気番組『逃走中』に出ると聞いてな」

「いや、あくまでも、二次創作作品内ですよ?」

「む、そうなのか? なら、私の身長や胸もおっきくできるかな?」

「いや、さすがにそれは無理でしょ?」

「ホラ。ナギ、邪魔しちゃだめですよ」

「連れて行かれちゃったわね」

「さあ、気を取り直して、紹介といきましょうか」

「そうね」

1・マリオシリーズより、マリオ・ルイージ・クッパ・ピーチ

2・ゼルダシリーズより、ゼルダ・リンク・ガノンドルフ

3・DQシリーズより、?女主人公・?主人公・ビアンカ・フローラ・バーバラ

4・ハヤテのごとく!より、ハヤテ・ヒナギク・マリア・水蓮寺ルカ

5・星のカービィより、カービィ・デデデ大王・メタナイト

「の以上19名です」

「思ったんだけど、こんな名作に挟まれて私たちが出ていいのかしら」

「まあ、国民的人気ヒーローのあの方もいますからね」

「ポケモンすらも抑えて、私たちが参戦って、何か逆に気がひけるわね」

「ところで、DQシリーズの参戦者たちですが、微妙に女性キャラが多い気がしますね？」

「そうね。そもそも、19人中9人が女性キャラよね」

「約50%ですね」

「ハヤテ！ 何でヒナギクやマリアが入っていて私が入ってないんだ！？」

「あゝ、たぶん、ナギの体力がないからじゃないかしら」

「そんな理由で！？」

「因みに、『けいおん！』のキャラも出そうかと考えていたらしいですが、同じ理由で却下されました」

「ついでに言うと、『Angel Beats！』っていうアニメキャラも出そうと考えていたらしいけど、既に既定値に達してるってことで却下されたらしいわよ」

「あ、カンペが出ましたね」

「あら？ キャラを増やすみたいね」

追加

1・けいおん！より、平沢唯、中野梓、秋山澪、鈴木純

2・Angel Beats！より、立華奏、仲村ゆり、音無結弦

3・D・C・シリーズより、さえきかなこ佐伯加奈子、もりかわともこ森川知子

4・バカテスシリーズより、吉井明久、坂本雄二、木下秀吉、ムツツリーニ

5・オリジナルキャラクター（同作者作品：家庭教師ヒットマンR
EBORN！ 光と闇より）より、高良夜空

「以上の14名が追加らしいですね」

「待て、何でD・C・シリーズの佐伯加奈子や森川知子の2人が本名（わからない人多数かも）なのに、ムツツリーニだけニツクネームなんだ？」

「作者の都合上らしいですよ？」

「そしてやっぱり私が出てこない！」

「そうね。オリジナルのキャラとか出てくるのにね」

「とりあえず、第二弾があるようだったら、頼んでみれば？」

「絶対採用してくれなそうだな」

「そ、そんなことないですよ!」

「第一、原作やアニメで殆んど出番がなかった、鈴木純とか出てるのにどうして私が・・・」

「ブツブツ言いながら戻って行っただわね」

「そういえば、既定値に達しているから却下されたはずの人たちまで出てきますね」

「そうね。ところで、REBORN!の主人公的ポジションの人が出てこないのに、どうして二次創作作品の主人公が出てくるのかしら」

「そんなことを言ったら、ドラクエシリーズの・・・?の主人公の名前が決まってませんよ」

「大丈夫かしらね、この作品」

「あ、次のカンペが出てきましたよ」

「『キャラの発表に時間かけすぎ。もう1 / 500文字超えた』」

「それ、僕たちのせいですか?」

「あながち違うとも言い切れないわね」

「『次行ってください』だそうですね」

「それじゃあ、ルールを説明するわね」

「今回の逃走中は、1回戦、2回戦A・B、決勝戦と全部で3つのブロックに分かれています。1回戦は、サイコロを振って、どちらが先にハンターを放出させるか、らしいですね」

「で、決勝戦は、2回戦A・Bの生き残った人たちで逃走する」

「2回戦の制限時間は、90分。賞金は、1秒毎に300円ずつ上がっていく、残り20分になったら、1秒間に600円ずつあがっていくみたいですよ」

「そして2回戦の賞金総額は198万円」

「決勝戦の制限時間は、3時間。賞金は、1秒毎に1000円ずつ上がっていく、残り30分になったら、2000円ずつ上がっていきます」

「決勝戦の賞金総額は、1260万円。よって賞金総額は、1458万円」

「因みに、決勝戦終了後、5人以上が残っていた場合、賞金は542万円追加され、賞金総額は最高で2千万円になるそうですよ」

「あら。それを手に入れたら、ナギに借金返済するのも早くなるんじゃないの?」

「とれば、ですけどね」

「そうね」

「そういえば、本家本元の『逃走中』より賞金が10倍以上になってますけど、スポンサーはどこなんでしょうか」

「あ、カンペよ」

「『この番組は、三千院家・白皇学院の提供でお送りします』」

「・・・」

「お金持ちのすることってわかりませんね」

「安心しろ。私にもわからん」

「私もわからないわ」

「ところで、説明だけのはずなのに、なんでこんなに時間かかってるんだって顔であそこの人が睨んできます」

「えーと、『既に2、200文字超えてるから早く終わらせる』だつて」

「えーと、監督の采配ミスでは？」

「それをいつちやおしまいだぞ、ハヤテ」

「そうね。それは言っちゃいけないと思うわ」

「思っても口に出して良いことと悪いことがあるんだぞ、ハヤテ」

「えーと、何で僕は怒られているのでしょうか」

「・・・」

「じゃあ、次回に続くのだ！」

「ええ！？」

この後ハヤテは2人に怒られたのは言うまでもない。

その後に、番組スタッフに4人とも怒られたのも言うまでもない。

標的1 ゲームのルール説明！（後書き）

さて、どうだったでしょうか。

導入部分にあたるのに、結構長いですね。

本編も殆んどがセリフというあまり芳しくない状況で進んでいきます。

飽きずに見てやってください。

鈴木純と佐伯加奈子は可愛いと思います。どうでしょうかね。

すみません。色々ミスがあったので、訂正しました。

ところで、こんなに人を出して、物語は大丈夫かな？ と思います。

因みに、A・Bチームはまだ分けていません。っていうか、ステージも決まっています。どうしましょう。これ、他の小説と違って、結構行き当たりばったりですね・・・。

標的2 逃走中

「さて、前회가グダグダだった分、まじめにやりましょう」

？ハヤテのごとく！ 綾崎ハヤテ。

「失礼ね。私はいつだって真面目よ」

？ハヤテのごとく！ 桂ヒナギク。

「・・・さて、今回からナレーションがつきます。ナレーションはここからです！」

「どうも。いや、やっと出番が貰えたよ。さすがにいつも同じ場所っていうのは疲れるからね」

会場にいる全員に衝撃が走った。

「だれ？」

「失礼ね！ 私は、ハヤテのごとく！ のマンガの表紙裏にいつもいる女神じゃない！」

オルムズド・ナジャ登場。

「あ、あれ？ 確か、ナレーションって、アニメの天の声の人に任せるんじゃない？」

「私が断ったわ」

「何勝手なことしてんですかー！ またボクがそこにいるスタッフさんに怒られちゃうじゃないですかー！」

「心配ないわ。私は神よ？ 神に不可能はないわ」

ていうか、自分で神って言う人ほど信じられないよね。

「はあ。まあいいわ。それで？ チームわけは？」

「それを今から発表するわよ！」

まずAチーム！ ハヤテのごとく！ ・けいおん！ ・Angel

Beats！ チームの計12人よ」

「私は、どう考えても、けいおん！ の奴らがすごく足引っ張りそうなのがするんだが」

「む！ そんなことないよ！」

「けいおん！ 平沢唯。」

「ゆ、唯先輩。そんな、人気作品のヒロインの方にそんな言い方しちゃダメですよ」

「けいおん！ 中野梓。」

「私としては、嬉しいけどね。だって、バンドマンなんですよ？ 楽しいじゃない」

「Angel Beats！ 仲村ゆり。」

「歌か」。私は歌はあまり聞かないけど、今ってどついう歌がはやってるの？」

「ドラゴンクエスト？ 女主人公。」

「え？ そうだな。AKB48の歌、とか？」

「けいおん！ 秋山澪。」

「ところで、どうして私は名前が出てないのかしら？」

「え？ ああ、それは決まっていなかったからじゃないですか？」

「酷いわね。私だってこれでも勇者なんだからね」

「あはは。そうですね」

「ところで、あなた、綾崎君だったけ？」

「はい」

ドラクエ？主人公がジツとハヤテを見つめ始めた。それに知られてなぜか、唯・澪・梓・ゆりまでジツとハヤテを見つめ始めた。

「なにやってんだか」

「Angel Beats！ 音無結弦。」

「そうね」

? Angel Beats! 立華 奏。

「さて、一番最初のゲームは簡単。只のサイコロ遊びです」

「サイコロ?」

? バカとテストと召喚獣 吉井明久。

「その通りです。お互いにサイコロを交互に振ってもらい、先に出た目の合計が16になった方が先にゲームを始めます。なお、サイコロは、相手のハンターボックスを進めることになります」

? 家庭教師ヒットマンREBORN! 光と闇オリジナルキャラ
鳳仙夜空。

「ただし、1が出た場合、出した方のチームのハンターボックスからハンターが放出されます」

「なに、その最悪ルール」

? マリオシリーズ ルイージ。

「さて、始めましょうか。なお今回は、参加者が奇数名ですので、

Bチームの私は、今回参加しませんでしたのであしからず」

夜空は、少し頬を染めながらそう言った。どうやら、こづいうMCみたいなことをやってみたかったようだ。

「さて、そろそろ始めましょうか。お互いに、位置についてください」

AチームはAと書かれた場所に、BチームはBと書かれた場所に立った。

「では、1回戦・・・開始！」

「じゃあ、僕からサイコロ振るね。えい」

コロコロコロ。・・・出た目は、3。

Aチームのハンターボックスが3マス前に進んだ。Aチーム、残り13マス。

「じゃあ、次は俺だな」

?ドラゴンクエスト?主人公。

「って、俺もかよ。まあいいや。スゴロク場で鍛えた腕、見せてやる！ おりゃあ！」

出た目、6。Bチームのハンターボックスは6マス進んだ。Bチーム残り、10マス。

お互いにサイコロを振りあい、5分後・・・。

Aチーム残り、3マス。

Bチーム残り、4マス。

「よし、次は俺の番だな」
「バカとテストと召喚獣 坂本雄二。」

雄二がサイコロを振った。出た目、2。Aチーム残り、1マス。

「なんてこった！」

「次は私ね」

？ドラゴンクエスト？ バーバラ。

「えい」

出た目は、3。Bチーム残り、1マス。

「あれ？ 拮抗してる？」

「次は私ね」

？D・C？ 佐伯加奈子。ちなみ、ニックネームはみつくん。

「えい」

みつくんが思い切りサイコロを投げたら、ハンターボックスにぶつかってしまった。

出た目、1。

「「「「・・・」」」」

「あれ？ エヘヘ。ごめんね」

「では、ハンター放出まで残り1分。まで説明しますね。説明終了と同時にカウント開始します。今回の第2回戦のステージは、何故か練馬区にある三千院邸です。三千院邸のあるところに皆さんを転送します。詳しくは、移動してから説明します。では、西園寺会長。よろしく願います」

？オリジナル小説、探偵学園主人公 西園寺桜。

「うん。A E S ^{アイズ}解禁。特殊瞬間移動能力装置起動。エネルギー充填開始。充填率23 / 24 / 25 %。依然上昇。転送可能区域まで残り70 %」

特殊瞬間移動能力装置というものをどこからともなく（懐から）、取り出した。因みに大きさは、1つの教室並。一体どうやって出したのかとか、どうやって懐に入っていたのかなどは当然聞いてはいけないこと。

「エネルギー充填率95 %。転送可能区域突入。転送準備開始。目標捕捉。転送準備開始」

あれ？ ていうか、こんな話だったっけ？ これ。

「エネルギー充填率100%。エネルギー充填完了。転送準備完了。さて、どうする？」

「よし。勝手に連れて行きなさい」

「アハハ。はい。転送！」

転送可能範囲に入っていたBチームの全員が三千院邸に転送された。

〈2回戦 Bチーム・三千院邸 ドリキヤス部屋〉

「……。ドリキヤス部屋……？」

「無意味すぎるな」

『さて、皆さん。全員ドリキヤス部屋に送られましたね。では、ルールを説明します。（詳しいルールは、^{ターゲット}標的1、2回戦のルール参

照)。次に、範囲ですが、範囲は、三千院邸母屋のみです。ハンターは、開始1分後に放出されます。母屋から出なければOKです。ただし、一部の作戦には母屋ミツノを出るものもありますが、それは別にOKです」

「なるほどな。しかし、結構大変そうだな」

？マリオシリーズ クッパ。

「お腹すいた」

？星のカービィ カービィ。

「お主は、さっきからそれしか言っておらんぞ？」

？バカとテストと召喚獣 皆お馴染み、美少女のような男の子、木下秀吉。

「む？ なんか今失礼なテロップが流れた気がするんじゃないが」

「きのせいだろ」

「うん」

「そうじゃろうか」

「悪い。女だと思ってた」

？—ゼルダの伝説(The Legend of Zelda) シ
リーズ ガノンドルフ。

「だよね。ボクも思ってた」

？—ゼルダの伝説(The Legend of Zelda) シ
リーズ 子どもリンク。

「失礼ながら、私も・・・」

？—ゼルダの伝説(The Legend of Zelda) シ
リーズ 子どもゼルダ。

『さて、準備はよろしいでしょうか』

「うん。準備は完了！ ね」

「ああ」

「うん」

「はい！」

全員が顔を合わせて頷いた。

『それでは、Bチーム、第2回戦を開始したいと思います。ハンター放出場所は開示しません。それでは頑張ってください。ああそうそう。棄権した場合、そこまでの賞金が手に入りますが、決勝戦には参加できませんのであしからず。では、改めまして』

全員がやる気になって、走り出すのと隠れる準備した。

『「逃走中」第2回戦Bチームの開始です！』

こうして、Bチームの逃走中が始まった。

誰が生き残り、何人が棄権するのか。

標的2 逃走中（後書き）

桜 「因みに、私の出番は少ないです」

デデデ大王「安心しろ。誰も気にしていない」

桜 「ひ、酷い」

クッパ 「ガハハ！ 我輩は必ず生き残って、賞金を手にし、キノコ王国を今度こそ征服してやるのだ！」

マリオ 「あいつを一番最初に失格にした方がいいんじゃないのか？」

ガノンドルフ「俺もか？」

子どもゼルダ「どうでしょうか」

子どもリンク「悪ささえしなければ・・・」

悪役除く全員「それはムリ」

悪役 「・・・」

標的3 Bチーム、逃走開始

ターゲット
標的3 逃走開始

「うわね。始まっちゃったよ。どうしよう」

？D・C・？ 森川知子。ちなみにニックネームは、ともちゃん。
テストのとき、名前欄にともちゃんと書いてしまう子。

「行こ！ ともちゃん」

「うん」

2人は、優勝して朝倉君（D・C・？ 朝倉純一。なお、CIRC
US社のD・C・？では、このともちゃんとみつくんがメインの話
しは存在しません）やことり（D・C・？ 白河ことり）に、私た
ちは自分でも頑張れるっていうところを見せたい、という意図から

今回の『逃走中』に参加した。

参加するからには、優勝するって意気込む2人。

『では、ハンター放出』

天の声（？）がハンターを放出した。

Aチームは、控室にいたので、テレビがある。そのテレビには、今回の『逃走中』が放送されており、ハンターがどこにいるのかもわかる。

くキノコ王国4人組く

「あら？ ルイージがいないわ」

？マリオシリーズ ピーチ姫。

「あれ？ 本当だ。一体どこにいったんだ？」

「一方その頃のルイージ」

「兄さん、ピーチ姫。クッパ」

何時ものように迷子になっていた。

「まるでいつもボクが迷子になってるみたいじゃないか」

「違ったのか・・・？」

「違うよ！」

「人生に迷うルイージ・・・？」

「だから違っつて!」

さて、さっきからあなたと話しているのは誰でしょう。

そのままルイージは泣き出してしまった。

「ちなみに、さっきから話していたのは私です」

?家庭教師ヒットマンREBORN! 光と闇オリジナルキャラクター 鳳仙夜空。

「何でもアリだね。あゝ、面白い」

「お」

「ん？ え〜と、坂本君・・・だっけ？」

「ああ。よろしくな」

「うん。こちらこそ」

「ところで、ここはどこなんだ？」

「地図によると、プレステ部屋らしいよ」

三千院邸には、プレステ部屋・ドリキヤス部屋・ロクヨン部屋等がある。最近では、ムシキング部屋ができたらしい。

「でもムシキングってかなり昔だよな」

「うん」

ピクツ。と、夜空が誰かの気配を感じた。

「・・・」

「どうした？」

「ハンターがいる・・・。声を抑えて」

「ああ」

2人はすぐさま、テレビの後ろに隠れた。

「・・・」

そのすぐあとに、ハンターが3人やってきた。

「お、おい。なんだ？ このタイミング」

「さあね。でもま、うまく逃れられたんだからよかったんじゃない？」

「ああ。確かにそうかもしれないが・・・」

ハンターが全員出て行ったあとで、携帯電話がなった。

諸君、楽しんでもらえているだろうか。これから諸君には、あるミッションを行ってもらう。

ミッションの内容はこれだ。

ミッション：5分以内に、三千院邸のどこかにある5つのスイッチを探し出し押すこと。

なお、失敗すると、5分後から1秒間に支払われる賞金が50%OFFだから、気を付けたまえ。

では、健闘を祈る。

「どうやって気をつければいいんだろう」

「さあな。ところで、そのスイッチって、これじゃないのか？」

プレステ3の下に青色のスイッチがあった。

「あ、本当だ」

ポチッ。っと、スイッチを押したら、OFFの文字が出てきたから、

一応成功なんだろう。

＼リンクSide＼

「スイッチだつて」

「そうですわね」

「どこにあるんでしょうか」

「しかし、ハンターに見つかる可能性があるぞ」

「・・・行かなかったら行かなかったで賞金も下がる」

？バカとテストと召喚獣 ムツツリーニ。

「うーん」

そう考えていると、遠目にハンターがいることにリンクとムツツリ
ー二が気付いた。

「隠れて」

「・・・」

「行っただか・・・？」

「ふう。結構大変だね、コレ」

「ええ」

「さて、じゃあ探しに行きますか」

「・・・(コクッ)」

リンクのその提案に対して、ムッツリーニが静かに頷いた。

標的 4 1つ目のミッション

ターゲット
標的 4 1つ目のミッション

三千院邸 食堂

「食堂だ」

「食堂だね」

ともちゃんとみつくんは今回、出番が多い。

因みにゲーム開始から4分経過。現在の賞金額「72,000円」

「もうギブアップしようかな」

「みっくん・・・」

ともちゃんが呆れていた。

「うそうそ。冗談」

屈託のない笑顔で笑った。

すると、廊下の先にハンターがいるのが目についた。

「ともちゃん！ こっち！」

咄嗟にともちゃんの手を引いて、すぐそばにあった部屋に逃げ込んだ。

「ふう。助かったね」

「うん」

しかし、この部屋には彼女たち以外の人がいたのだった。

「バカテスSide」

「それにしてもムツツリーニはどこにいったんだ？ 雄二もいなくなっちゃったし」

「んむ？ 心配なのか？」

「そりゃそうでしょ。いくらあいつらがバカだといっても、仲間だからね」

「お主にバカ呼ばわりされるとは、気の毒じゃのう」

？ 秀吉が何か言ってた気がするけど、気のせいだね。

くカービィSideく

「あれー？」

「どうした？」

「あそこに青いスイッチがあるよ」

「む？ では、あれなのか？」

「さあ？」

「さあって、あのなあ」

デデデ大王が呆れていた。

デデデの口調がわからなかったので・・・。

「よいしょ」

カービィがスイッチを押した。

「よし、他のスイッチを探しに行こう」

「おー！」

＼ZELDA Side＼

「これをこうすると、魔人拳！」

なぜかガノンドルフがゼルダとリンクに魔人拳を披露していた。

「・・・何してるんだか」

バキヤッ。

その拍子に、天井にあったスイッチが壊れた。

「
「
「
・・・
」
」
」

全員が死んだ魚のような目になった。

「よし、一刻も早くここから立ち去ろう」

お咎めを喰らう前に、全員がその場から離脱した。

只今の賞金総額、5分経過で「90,000円」

結構な金額になってきましたね。

～夜空Side～

「あれ？ どうして私だけ？」

「知らん」

「まあいつか。よつと。これで全部かな？」

「ああ」

夜空と雄二の2人は、ハンターから逃げながら黙々とスイッチを破壊して回っていた。

「あれ？ メールが届いた」

『たった今、鳳仙夜空と坂本雄二の2人の活躍でスイッチが全て押された。よつて、賞金は減額されず、そのままとなる。次のミッシェンを待て』

標的4 1つ目のミッション(後書き)

マジで?と?の主人公の名前どうしよう・・・。

誰かいい案ないですか?

この小説、迷走を続けてますね

標的5 2つ目のミッション

ターゲット
標的5 2つ目のミッション

「さてと。あそこにハンターがいるけど、どうする?」

「当然、逃げる!」

く三千院邸・プレステ3部屋く

「あ、プレステ3みっけ」

「本当だな。しかし、このゲーム機1つのためにこんなだった広い

部屋を用意するなんてな」

「確かにね」

ピピピピ。2人の持つ携帯電話が鳴った。

『ミッション2を伝える。ミッション2。現在、3階の衣裳部屋周辺にハンターがいる。そして、衣裳部屋にあるロッカーの中に赤いバラが入っている。ゲーム終了までにその花を胸につけ、且つ、散らさなければ、予定通りの賞金が入る。花を入手できず、若しくは散ってしまった場合、賞金額は半額となる。Good Luck・日本語で言つと、幸運を祈る』

「……。どこの少女革命のルールよ」

「気にしちゃ負けじゃねーのか？」

「何かム力つくわね」

「ま、気にすんな。それより、3階だったか？ 早く行こうぜ」

「え？ あ、うん」

くドラクエSideく

「・・・。じゃあ、行く？」

「当然ですわ！ お金はいりませんが、ここで諦めたら負けな気がしますわ！」

「あ、うん。そうよね」

「ところで、いい加減に名前を決めて欲しいわね」

「そつえばそつだね」

未だに決まらない、ドラクエ5とドラクエ4の主人公の名前。本当にどうしましょう。

「作者も困ってるね」

「当然ですわ。公式をつかうか迷っているんですもの」

「っていうか、つい5分前まで公式の名前も知らなかったんだっけ？」

気にしないで話を続けましょう。

くバカテスSideく

「そついえば雄二たちは？」

「知らん。しかし、行けばいるんじゃないのかのう？」

「ならいいけど・・・」

「ところで、ムッツリーニの姿が見えぬが、どうしたんじゃ？」

「それこそ知らないよ」

＼ Z E L D A S i d e 　

「さて、行きますか？　ゼルダ姫」

「はい」

「待て。あそこにハンターがいる」

ガノンドルフが指をさした先に、3人のハンターがいた。

「そういえば、ハンターって何人放出されてるの？」

放出されている人数は、全部で10人。B1階、1階、2階、3階に各2人放出され、1階に更に2人放出された。現在ガノンドルフ達がいる2階には4人いる。

「しかし、ここを乗り切らんと、3階に行けないな。どうする」

「そりゃあ、ガノンドルフが囿になって、その隙に僕たち2人が上に行く。というのはどう？」

「なるほど。って、それ、俺が一番被害を被ってないか？」

「なるほど。それはいいかもしれませんがね」

ゼルダが少し怒りながら、その案に賛成した。

「な、何でこんなことに・・・」

仕方なくその案に乗り、ハンターをひきつける役を引き受けた。

一体どうなることやら・・・。

標的5 2つ目のミッション（後書き）

標的 6

標的 6

「さて、さっきのは何だったんだろうな」

「知らないわよ」

〈回想〉

前話で、ガノンドルフが罠になってひきつけている間にゼルダとリンクがバラをとってくと決まったので、ガノンドルフが罠となつてハンターをおびき寄せたのだが・・・。

「さあさあ。こちらを着てください」

「ま、待て！ ゼルダ！ お前、そんなもの一体どこから！」

ゼルダがどこからともなく謎の服を持ってきた。

「そんなことどうでもいいじゃないですか」

全力でそんなことないとツッコミたいガノンドルフだった。

5分後・・・。

「くそ。大魔王である我輩がこのような屈辱的な格好をさせられるとは」

「ぶくく。お、お似合いですよ。」

「嬉しくない」

そんなことをしているうちにハンターに見つかった。

「リンク、逃げましょう！」

「うん。ガノンドルフ、頼んだよ！」

「な、おい！ 待て！」

こうして2人に置いてかれたガノンドルフ。

「あそこだね」

「ああ」

2人そろって衣裳部屋を見ると、その方向から1人の男が走って来た。

「・・・」

その後ろからハンターが2人追いかけて行った。

「ねえ、何なのかな。あれ」

「さあな。最近暑くなってきたからな」

「」
「」
「」

「そうだね・・・」

「そうだな」

因みにさっき走っていったのは、ガノンドルフ。

女装した。

「さて、ハンターもいなくなったし、とっととバラをとって行こう」

「そうだな」

2人は、衣裳部屋に向かった。

「あ、これだね。バラ」

「みたいだな。にしても、何だ？ この部屋は。イヤミったらしく
宝石類や衣服がたくさんあるな」

「三千院家だもん」

それは理由になってない。

「さて、あいつらが帰ってくる前に逃げるか」

すると、廊下の方から足音が聞こえてきた。

「！」

「……雄二、ハンターみたいだよ」

「ちっ。マズいな」

「どうする？ 窓から出る？」

「ああ。それしか方法はなさそうだな」

しかし、バラを散らすとその時点で失格。確かに窓から飛び降りたら逃げ切れるだろう。しかし、そのためにバラを無駄に出来るのだろうか・・・。

「ふう。行くよ！」

「おう！」

無駄にした。

っ
て
い
う
か、
3
階
な
ん
だ
が
・
・
・
。

標的
7

標的
7

「いちち。おい、大丈夫か？」

「う、うん。なんとか」

「バラは・・・？」

「バラもなんとか無事」

手に持っていたバラを高々と掲げて、雄二の質問に答えた。

「しかし、不死身だよな」

「マンガのキャラだから」

「俺は小説だけだな」

「……」

しかし……。

「ここは一体どこなんだ？」

辺り一面には、ジャングルが広がっていた。

「さあ？ 私が知りたいわね」

「確かにな」

ルールを確認しておく、母屋から外に出てはいけない。というルールがある。さて、これは母屋からでているのだろうか。

「お前ら2人、失格な」

というメールが送られてきた。

「え？」

「なに！？」

当然である。

くドラクエSideく

「まさか、バーバラが夢の世界の人間だったとはねく」

「確かにね」

「ソフィアさん、リュカさん。ゲームをやっていないで、早くバラを取りに行きましょうよ」

「そうだよ。私がいくら可愛いからってく」

みんなが一斉にバーバラの方を向いて、痛い人を見るような眼をしながら、バーバラを見つめた。

「なによー!」

ところで、ドラクエ？とドラクエ？のバーバラの一人称が変わっているんですよ。気づきました？

「さて、頼んだ。バーバラ」

丸投げ。

「り、リユカ・・・」

「あはは」

苦笑いする3人。ところで、本来この4人は、Aチームだったはずなんです、気が付いたらBチームに溶け込んでいたので、Bチームに変更しました。標的2もその影響で変更です。

「わかったわよ！」

バーバラがルーラでその場から姿を消した。

くゼルダSideく

余談ですが、エグゼと入れたら最初、江具是って出てきたんですよ。

「・・・」

「どうしたの？　ゼルダ」

「いいえ。何でもありませんわ」

何か、変なのが紛れ込んでいた気がしましたが、気のせいですわよ

ね。

「さて、ガノンドルフがハンターをひきつけている間に、バラを貰って行きますか」

ところで、ここまで書いて間のいい人は、わかってますよね？ あの2人の後に誰が来たのか・・・。

今回は、ここまでです。

本来何も考えていないのに、書こうとしたのが間違いでした。

でも続きます。

標的 8

標的 8

〈衣裳部屋〉

「……。本当に私1人で来てるし。リュカもソフィアもフローラもビアンカも手伝ってくれないし」

〈回想シーン〉

「あ、戻って来た」

「ねえ、本当に私1人で行かなければいけないの?」

「だって、見つかったところでルーラとかリミットで逃げられるでしょ？」

「4人とも使えるじゃない！」

「つべこべ言わず行ってきてください。そうしないと……うふふ」

「ふ、フローラさん……？」

な、何かフローラが怖い……。ドラクエ？に出てくるフローラは腹黒いという設定だそうですので、この小説はドラクエ？に則つてます。

「こ、怖い」

「行ってきますー！」

バーバラはルーラを唱えた。しかし、天井に頭がぶつかってしまった。

「「「「・・・」」」」

「そういえば、建物の中ではルーラは使えなかったんだっけ」

（ドラクエ？のダーマ神殿は除きます）

「・・・。えと」

「地道に頑張れ」

グッ。リュカが親指を立ててカッコイイ顔をした。

「リュカ、そんな顔しても、結局は私が一番大変なだけじゃない」

「気のせい気のせい」

「さあ、行ってらっしゃい。バーバラ」

「回想終了」

「衣裳部屋」

「むう。あんなにハンターがいたんじゃ入れないよ」

「そうだな」

「そうだね」

「そうですね」

「「「「「」」」」」」

「誰！？ あ・・・」

こちらをハンターが見て、走り出した。

「・・・。ねえ。アンタ達のせいだよね」

「いや。お前のせいだろ」

「じゃあ、私はこれで」

バーバラはモシャスを唱えた！

バーバラははぐれメタルに変身した。バーバラは逃げだした！

「ぬお！ あいつだけ酷くねえか！？」

「魔法使いだね」

「そうですね。じゃあ」

「ガノンドルフ、よろしくね」

「また俺かよ！」

「じゃ！」

「それでは」

ゼルダの技で、ゼルダとリンクがその場から姿を消した。

「何か俺だけいつも大変な目にあってねえか？」

そんなことを思っていると、ハンターに捕まってしまった。

『ガノンドルフ、アウト』

「捕まってしまいましたわね」

「まあ、いいか」

「衣裳部屋」

モシャスの時間が切れた！ バーバラの姿が元に戻った。

「バラって、これだね」

宝箱（？）の中から、5本のバラを取り出した。

「さて、どうやって戻るのが問題だね」

バーバラはドラゴラムを唱えた。バーバラの姿がドラゴンキッズに変身した。

「これで、出られるわね」

バーバラは窓から外に出て行った。

「確か、母屋から外に出なければいいのよね」

バーバラは変化の杖を掲げた。バーバラはスカルスパイダーに変身した。

バーバラは壁伝いにリビングに逃げに行った。

「うお！ バーバラ！ 何で窓の外から！」

「うん、色々あってね。それより、どうして皆はずっとゲームをしてるのかな？」

バーバラの表情が若干引き攣った。

「ああ、うん。結構たくさんあってね」

今度は、スターフォックス64をやっていた。

「ねえ皆。私が大変だった間にずっとゲームやってたのって、おかしくない？」

「そうかあ？」

ソフィア除き、誰もバーバラが起きていることに気が付いていなかった。

「・・・マホカント・・・」

ソフィアはマホカントを唱えた。ソフィアの前に光の壁がはられた。

「いい加減にしてよ！」

バーバラは、イオ系最上位呪文イオグランデ、ヒャド系最上位呪文マヒャデドス、ギラ系最上位呪文ギラグレイド、メラ系最上位呪文メラガイアー、ドルマ系最上位呪文ドルマドンを同時に唱えた。何と、イオグランデ・マヒャデドス・ギラグレイド・メラガイアー・ドルマドンが合体していく！

何と、バーバラが4人に分身した！ 合体呪文はギガテラデインになった。バーバラは、ギガテラデインを唱えた。激しい神の裁きが、4人に向かって、落ちて行く！

ギガテラデインとは、オリジナルデイン系最上位呪文である。敵全体に、10001200のダメージを与える。

ドーン！ 皆黒焦げになって、その場に倒れた。

「危ない」

しかし、ソフィアだけ生き残った。ソフィアのマホカンタがギガテラデインを跳ね返した。しかし、バーバラにはきかなかった。

「ちん」

ソフィアはザオリク×3を唱えた。皆復活した。

「ハンターが来たんで、私は逃げます。ああ、それと、さっきのギガテラデインによって、バラの花が散っちゃったから、とって来ないよね」

バーバラはモシャスを唱えた。バーバラははぐれメタルに変身した。バーバラは逃げだした！

「うおーい！」

裏切り者（？）の末路である。

標的 8（後書き）

あれ？ あんまり逃走中って感じがしないね。呪文を唱えたりして
るし・・・

標的 9

標的 9

「そういえば、残り時間ってどれくらいなんだろう」

うつかりしていて忘れていましたが、残り10分ぐらいです。なお、これまでの賞金総額は162万円。

ユーロになおすと、15089?です。アメリカ\$の場合、19151\$です。

「あと10分か。それなら逃げられそうかな」

「あ、やっと見つけた」

「え？」

「バーバラ！」

「えと。リュカ？」

「そうだよ。1人だけさっさと逃げちゃうなんて」

「あはは。ゴメン。それより、他の人たちは？」

リュカの周りに他の人たちがいないので、質問してみた。

「え？ ああ。あそこでお茶を飲んでる」

リュカの指差した方向を見ると、フローラ・ビアンカ・ソフィアの3人が優雅にお茶を飲んでいた。

「何優雅な一時を過ごしているのかな」

「まあ。いいんじゃない？」

「それより、何で皆この食堂に？」

「みんな・・・？」

「そう。あっち」

マリオチーム・カービィチーム・バカテスチーム・ゼルダチームが勢ぞろいしていた。

「あと少しでゲーム終了だからな」

「お腹すいた」

「何言ってるんだか」

『では、最後の司令だ。三千院邸のどこかに青いスイッチが隠されている。それを時間内に発見し、押さなければ、全員の賞金総額が半額になる。ただし、これはBチームのみだ。頑張れ』

「何これ。いやがらせ？」

「さあ」

「とりあえず、行くか」

「そうだね」

全員が一斉に散らばった。のこり制限時間は8分。

〈食堂〉

「おい。そっちはあったか？」

「いや。ない。そっちはどうだ？」

「こっちもないぞ」

〈1階廊下・西側〉

「ぬおおおおお！　なんでハンターに見つかってんだ、てめーは
！」

「知らないよ！ 雄二が悪いんでしょ！」

「何だと！？ てめー！」

「・・・なぜ雄二がいる。失格になったはずだが」

「残念だったな、ムツツリーニ。あの時飛び降りたのは、俺たちの人形だ」

せ、セコイ。

「そんなことよりさ、どうしてハンターって、あんな平然な顔をして走れるんだろっ」

「そんなこと俺が知るか」

＼2階・ドリキヤス部屋・P S 2部屋・W i i部屋・P S 3部屋・
X B O X 3 6 0 部屋＼

「こちらX B O X 3 6 0。何も見つかりませんでした」

「こっちもだよ、兄さん」

「こちらもだな」

「こっちもよ。マリオ」

＼2階・廊下＼

「何でハンターに追いかけてるの？」

「そんなの、私が知るわけありませんわ」

「それもそうか」

「3階」

「みつくん。あつた？」

「ん～。ないよ」

「どこにあるんだろうね」

「ちゅあ」

1分後。

「あつた！」

「よし！ 早く押せ！」

「うん！」

ポチッ。

押すのと同時に、制限時間が来た。

<では、Bチームの成績は、賞金は全額手に入ります！>

「や、やったー！」

こうして、Bチームの戦いが終わった。

標的10

「いっやゝ。大変だったゝ」

「本当にねゝ」

「残念だったな、お前ら」

「仕方ないよ」

「はっはっは」

「ところで、突然話が終わると、皆どうなるのかな」

「俺に聞くなよ」

「そうだよな。因みに、今回は、勝利を祝うしか考えてなかったから、短いし、お（もがもが！）」

「それ以上言うな！」

「にしても、色々あったな」

ぽわわわん。

「いやいやいや、そんな回想シーンの入り方ないから！」

く回想シーンく

「入っちゃった!」

「グハッ! き、貴様ら! 覚えている・・・」

「そんなシーン、1つもなかったからね!？」

その後も、ロクな回想が1つもないまま回想終了

「お、今回はお祝いしか考えてなかったから、本当に短いな。もうそろそろ終わりだぞ?」

「どっかのラジオとかＴＶの場面みたいな短さだな」

「確かに」

「どうでもいいが、更新が遅いのはどうにかしてほしいな。俺達の体が冷えちゃう」

「鈍るの間違いじゃない？」

「どっちでもいいだろ」

「テレビテレビ」

『S K E T 団ス!!!』

「なに、この無駄なコラボ・・・」

「あんたはあんたで何泣いてんの」

「うう。だって、ルイズが可哀想なんだもん！」

「ニコ動・・・。しかも有料会員かよ・・・」

「ゼロ使アニメ第二期最終話は泣けたね」

「確かに！ 『さよならの結婚式』は泣けた！」

「さっさと宣伝してるな」

「まあ、いいんじゃない？ この小説の作者も、何の考えもなしにこの作品書いていたんだから」

「ん？ 書いていた？ どういうことだ？」

「それじゃあ、また会いましょう」

「バイバイ」

「だからどういうこと！？」

標的10（後書き）

いや、まさかの最終回ラッシュ！

第一章完了！ 第二章は、年明けごろに書き始めたいと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1608u/>

逃走中！

2011年11月13日19時16分発行